



## 度重なる水害との闘い

それでも、茨戸川周辺の人々の生活に平安が訪れたわけではありませんでした。豪雨に対しては、捷水路だけでは力不足であり、その後も水害との闘いは続いたのです。

中でも、昭和五十(一九七五)年に発生した大洪水との闘いは、住民にとって厳しいものとなりました。停滞前線と台風によって全道的に大雨が続き、伏籠川、創成川、発寒川が合流する茨戸川では、上流の水が一気に流れ込んで水位が上昇。すぐに大量の水を石狩川へ放出しなくてはなりませんでしたが、しかし、大河・石狩川は上流の道央地

## 放水路の完成

茨戸川の水がスムーズに流れない限り、低地帯の茨戸川周辺地域の人たちは洪水の危険に脅かされ続けます。この問題をどのように解決したらよいのだろうか。その答えとして昭和五十一(一九七六)年に始まったのが、石狩放水路の工事です。これは、洪水の際に茨戸川の水を直接日本海へ放流することができると、全長約二・五キロメートル、幅約五十メートルの大事事となったのです。

昭和五十六(一九八二)年、ようやく放水路の完成が間近に迫ったとき、またもや集中豪雨が襲ってきました。



域からの水により、下流の北区分近ではすでに満杯状態。茨戸川よりも水位が上昇し、茨戸川と石狩川を結ぶ志美運河では、通常とは逆に石狩川から茨戸川へ水がどんどん流れ込んだのです。行き場を失った茨戸川の水は、とうとうあふれ出てしまいました。

このとき、篠路、茨戸、太平の各地区では床下・床上浸水が続出し、近隣の小学校などの避難場所に地域住民が避難。不安な数日を過ごしたのでした。



▲昭和56年8月、緊急通水したときの様子

しかも観測史上最高を記録するほどの大雨で、収穫寸前の畑をのみ込み、濁流がじわりじわりと道路を覆っていききました。たくさんの人たちが土のうを積んで河川の決壊を防いだり、ポンプで排水したりと、押し寄せる泥の海の前に懸命に闘っていました。しかし、このままでは昭和五十年の悪夢が繰り返されてしまう……。そんな不安を誰もが抱えていたのです。

で、その厳しさに耐えかねて土地を離れる人がたくさんいましたね。

昭和五十六年の洪水の時には、収穫直前の畑が水にのみ込まれてしまい、農業共済組合に勤務していた私は、大雨が降り続ける中を水田や畑の被害調査に走りました。そのとき、牧草や家畜が石狩川に流されていく様子を目の当たりにし、ぼうぜんとしたことを覚えています。

厳しいこともありましたが、私は自然豊かなこの土地を愛していますから、今も住み続けているんです。以前はずいぶん濁っていた伏籠川も、周辺の清掃の成果もあって、最近はまだ魚が戻ってきているんですよ。

## 安心なまちへ

そこで、さらなる被害を防ぐため、北海道開発局は未完成の石狩放水路を緊急に開くことを決定。徹夜の突貫工事の末に、水を流したのです。上昇していた水位は見る見るうちに下がっていき、被害の拡大を防ぐことができたのでした。

幾度の洪水と闘い続けたこの地は、放水路の完成によって洪水の心配が少なくなり、現在では、畑や田園、住宅地が広がっています。それは、たくさんの人たちの苦労や努力によって築き上げられたものであり、茨戸川の変遷はこうした努力の証しなのです。